

令和2年度 水産試験場研究成果発表会のご案内

水産試験場では、取り組んでいる調査研究や技術開発の成果を報告・発表することにより、本県水産業の振興・発展に寄与することを目的として「水産試験場研究成果発表会」を開催しています。

今期も令和3年1月下旬に県漁青連総会・幹部移動研修会との併催による開催を検討してきましたが、11月に入り第3波と見られる新型コロナの感染が拡大しており、集客方式による開催は困難との判断に至りました。

しかしながら、成果発表会は、研究員のプレゼン能力向上や水産試験場の成果を広く広報するための重要なイベントであることから、ソーシャルメディアなどを活用した代替方式により実施することとします。

具体的には、「水産試験場ホームページによる動画配信方式」にての実施を予定しています。

現在、水産試験場ホームページを管理する会社と具体的な方法の詳細の検討を行っているところで、準備ができ次第、開催周知のための文書を通知いたしますので、是非ともご覧いただくと幸いです。

1. 動画配信予定日時：令和3年2月1日（月）～

2. 配信 URL：<http://www.mz-suishi.jp>



※動画配信予定日時になりましたら、宮崎県水産試験場ホームページの「新着情報・お知らせ」欄に「令和2年度水産試験場研究成果発表会」をアップします。



3. 発表内容(予定)

(1) 日向灘のアカアマダイの資源回復の取り組みについて (資源部 主任研究員 中西健二)

沿岸漁業の重要な水産資源の一つであるアマダイについては、平成 28 年(2016 年)から「宮崎海域アマダイ類の資源回復計画」を実施していますが、水産試験場では、資源管理・回復手法の検討を行っています。

本研究では、日向灘のアカアマダイの資源状態の把握や資源量・漁獲量の将来予測を行うとともに、資源回復手法の一つである人工種苗放流の放流効果を把握するための標識手法や放流効果を高めるための放流方法の検討を行っており、それらの成果について紹介します。

(2) イセエビ資源把握と合理的な利用法について (資源部 技師 外山寛隆)

宮崎県のイセエビ漁獲量は全国第 6 位(平成 30 年)で、単価も高いことから沿岸漁業の重要な収入源となっていますが、1960 年代は 100 トン以上の水揚げ量は、現在は 50 トン前後と低迷しています。

このため、水産試験場では、より合理的な資源利用を図るため漁獲実態の把握と初期資源量の推定などを行っており、それらの成果について紹介します。

(3) 養殖海域の環境 DNA による魚病病原体検出技術の開発 (増養殖部 技師 俵佑誠)

世界的な水産物の需要増大に伴い、養殖生産による水産物の輸出の動きが各地で活発化しており、本県ではブリ類を対象とした大規模沖合養殖システムの開発が行われています。

この中で、水産試験場では、魚病被害の軽減を目的として、海水に含まれる細菌等の DNA を用いた魚病の早期発見技術の開発に取り組んでおり、その成果について紹介します。

(4) レトルト処理したオオニベの褐変原因について (経営流通部 主任研究員 長野昌子)

近年、水産物加工の分野では、レトルト食品などの常温流通が可能な加工品の開発が盛んになってきています。特に、新型コロナウイルスの発生以降、県内の水産加工業者からレトルト食品の開発に係る相談が増加している状況です。

本研究では、オオニベで試作したレトルト食品において発生した褐変について、その原因を推定するなどしたので紹介します。